

雑草通信

船津好明 1936年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返す、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さい構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

五感と美意識(4 視覚の巻)

文芸や比喻や心情という視覚のことではなく、目で感じる光のことで、強弱、色相、濃淡がある。自然の景色、競技の観覧、演技の鑑賞、動植物、物体などのほか、文字、絵画、写真、動画、造形など、人工の記録も視覚の対象になる。夢の中の情景や幻覚は視覚とは考えない。実体の有無に関係なく、光を目で認識するのが視覚である。漆黒の闇では視覚は利かない。

五感は全て美意識で理解できるというのが私の考えだが、特に視覚はその代表格で、「美術」という言葉がある。視覚による美を創作する技を指している。絵は色の平面的配列に過ぎないという言い方には美意識はない。

美学という学問があることは知っているが、内容は知らない。美学を知ろうとせずに美を云々する私は、冒険をしている気分である。

美意識は不思議なもので、個人の主観であるから、絶対的な美というものはない。一つの情景を目にし、ある人は世界一素敵と思う一方で、別の人が目を背けることもある。同じ情景も、目にする場面や心理状態によって、美しく見えたり醜く見えたりする。美醜の印象は一定不変ではない。美術館の美術品は美的価値があるとされるが、個人の主観による美醜の感覚とは別のものである。

視覚が他の感覚(触、味、嗅)と違う点は、保存が効くという点である。写真や映像などに残すことによって、本物に近い視覚が得られる。脳裏に描くことも容易である。即ち、写真などは疑似的ではあるが、実体の視覚をかなり忠実に再現でき、しかも多くの人の目を満足させている。触、味、嗅の三感はそうはいかない。

美は快、醜は不快に置き換えられる。何が美で、何が醜か。簡単に言えるのは「もう一度」の体験を望むか否かであろう。望むのは好きだから、快いからで、美感に繋がっている。ある人が一枚の絵を見て、その絵から離れた後、もう一度見たいと思うような絵は、その人にとって美しい絵なのである。その人に美意識が働いている。理由はどうでもよい。「もう一度」は視覚以外にも当てはまる。聴覚ではもう一度聴きたい音楽かどうか。味ではもう一度食べたいかどうか。五感以外にも当てはまる。ある種の行為をもう一度してみたいかどうかで、好む行為(美)か避けたい行為(醜)かに分かれる。美意識は誠に広く働く。

視覚は商品になる。自然の景色は観光価値になる。人工の美術品が売買されるのは誰もが知っている。一部の美術品は投資の対象にもなっている。この場合は「もう一度」見たい、とは別の経済的価値観が働いている。

私は以前、ある大学の美術の先生と雑談をしたことがある。先生によれば多くの卒業生が芸術家として生計を立てていくことが難しいのが課題だという。芸術家が自分の意思を最大限に込めた作品を作ることは、最も尊いことであろう。言い換えれば、作品は作者にとって最大の価値であるべきことは確かである。ではなぜ売れないのか。私は「作品は自分にとって最大の価値である他に、他人も価値を覚えなければ売れないと思う。したがって制作には市場性というものを考える必要がある。」と先生に申し上げたが、受け止めて頂けなかった。芸術を知らない生意気な奴と思われたかも知れない。

.....